MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１２．３０　発行元
第 540 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。見慣れた作家の作品が二作と、あまり取り上げてこなかった作家の作品が二作。手にした本が期待通り、または期待以上の出来であれば嬉しいのだが…。

ブックオフへ行く機会が減少

以前は一ヶ月に一回程度ブックオフに行っていたのに最近は半年に一回程度になってしまった。行ってみても欲しい本がなくなったからである。ブックオフに出ている本の多くはここ十年くらいの間に出た比較的新しい本。この期間の読みたい本はだいたい読み尽くしたということ。未読の本があったにしても、それは図書館にも置いてあるというような…。

私が購入しようとリスト化してある本は二十年以上前のもの。大きな古書店にでも行かないと出会えないだろう。東京に出掛けるような機会はないし。ネット上にはたくさん出ているけれども、まだ利用しようという気持ちにはならない。まあ、今は新刊を読むことで手一杯になりつつあるということか…。

ということで「最近出た本」。この秋は順調に本が出版されている。お金の方に余裕がないのでとても全部は買えない。物価高。買うと決めているシリーズものを購入するだけでも大変になりつつある。

本城雅人『宿罪・二係捜査1』

９月に角川文庫から出た本。『二係シリーズ』の一作目。現在二作目も出ている。本城雅人と言えば『スカウト・デイズ』など野球を題材としたミステリで出発した作家。野球好きの私にピッタリだったのだが、その後別テーマに変化したので読むのをストップ。本書は警察小説の形で書かれたもの。

警視庁の「遺体なき殺人事件」の再調査を担当する「二係」。１５年前の女子高校生の行方不明事件に着目する。途中まで調べを続けていた水谷巡査が亡くなったので、二係の信楽、森内、そしてかつて関わっていた香田が取り組む。新聞記者の藤瀬も協力する。視点がくるくる変わるのが難。警察小説としての出来は「並み」。

望月麻衣『京都寺町三条のホームズ20』

副題は「見習いたちの未来展望」。１０月に双葉文庫から出た本。このシリーズも２０巻目になった。ミステリ内容はどんどん薄くなっていく。今回は葵が京都国立博物館でマネジメントのインターンを体験する内容と、円生が匿名で香港の美術館に作品を出品する内容の二本立ての構成になっている。後半盛り上がる。

京都南座では秋人主演の現代劇が幕を開ける。これは以前シリーズの中に登場した相笠くりす作のエラリー・クイーンの有名作品パスティシュを舞台劇に仕立てたもの。ミュージカル風の味付けがなされているという…。その作品についてはこの『ミステリ読書案内』でも触れたけれども、今一つ感心しなかった内容だった。

鳴神響一『鎌倉署・小笠原亜澄の事件簿』

副題は「極楽寺逍遥」。１０月に文春文庫から出た本。シリーズ三作目。鎌倉署の刑事で幼馴染の吉川元哉と小笠原亜澄のコンビが事件解決に取り組む話。今回は、鎌倉大仏からちょっと入った山の中腹で美術館学芸員の鰐淵貴遥が石で殴られた様子で死んでいたというもの。最初は手掛かりなしの状態だったのだが、被害者の父親で著名な画家の鰐淵一遥を訪ねて話を聞くうちに、傍に置いてある別の画家の絵に気持ちが惹きつけられる。更にそれらの関係者の話を聞いて回るうちに…。この『小笠原亜澄』のシリーズは鳴神作品の中では今ひとつインパクトに欠け、もの足りなさを感じる。

久青玩具堂『まるで名探偵のような 雑居ビルの事件ノート』

６月に東京創元社のミステリフロンティアから出た本。ＹＡ出身の作家のように見受けられるが…。五編収録の短編集。高校生の小南通が語り手。雨宿りで何気なく入った喫茶店「るそう園」で聞いた話から、つい謎解きに口を出してしまう。でもそれは毎回中途半端で、店主の娘・三津橋芹に名探偵役をとられてしまう。

第一話の『名刺は語らない』、第二話の『日記の読み方』あたりはふわふわした感じで、「まあ、そうかもしれない」程度の論理なのだが、第三話の『不死の一分』から引き締まった流れになる。『不死の一分』は江戸時代の道場記録から連続密室殺人事件の顛末を推理する話。文を読んだり、話を聞いたりする中から推理を組み立てていく「安楽椅子探偵」の形。密室トリックに挑んでいるところが評価できる。この作家、ミステリ部分にプラスして、登場人物が抱えている過去のいきさつや精神的な背景を書き込もうとしているのが特徴。その点は今流行りの流れに乗っていると言える。